えんちょう通信

No.５９
令和３年１２月１５日
福島市立清水幼稚園
発行者　佐藤 一男

見えないもの、見えにくいものを見えるように

１２月８日(水)、２階の広い遊戯室で年長組の男の子たちが、「マルチパネ」という大きなブロックを組み立てて、海賊船を作りました。舵を切るハンドルもついています。

その日、少し前まで、この遊戯室では、みんなで朝の体操をやって、かけっこをしていたので、あっという間に大きな海賊船ができていて、びっくりしてしまいました。

男の子たちは海賊船に乗り込んで、大海原にこぎ出しました。海賊船ごっこの始まりです。
「大波が来るぞ！逃げろ！」「外国の船だ！」
海賊船の後ろには宝を入れる部屋もあります。食料の大きなドーナツを運んでいる子もいます。

男の子たちみんなが、宝を探して、海賊船で荒波を乗り越えていくという物語を共有し、役割を分担したり協力したりしているのです。年長組になると、こういう大きな遊びができるようになります。

１０時１０分になりました。片付けの時間です。すると、みんなで惜しげもなく海賊船を解体して、片付け始めました。担任の先生が指示をしたのではありません。どの子も、時計を見て片付けを始めたのです。子どもたちは同じ形のパーツをまとめて、箱にしまったり、長いパネルをきちんと重ねたりしています。あんなに大きかった海賊船は、あっという間に無くなってしまいました。

十分に自分たちの遊びを楽しんだから、こういうふうにサッと片付けも協力してできるのだなと感心してしまいました。

このように子どもたちの「遊び」はその場で消えてしまいます。ですからその遊びが、どんなもので、その「過程」で子どもたちが、どんなことを考えたり、話したりしたのか、友だちと意見が合わないときに、どうやって折り合いをつけたのか、そういったことは、なかなか見えてきません。砂場の遊びやままごとも同じです。小学校のように作文に書いたりテストをやったりするわけでもありません。ですから幼児期の教育は、その成果がなかなか見えないという意味で「見えない教育」と言われることもあります。それでも、子どもたちの成長として確実に残っていきます。

目に見えないもの(見えにくいもの)を少しでも見えるようにしていきたいと思っています。